

ゲノム解析を用いた「ひょうご味どり」の もも肉割合の増加

【背景】

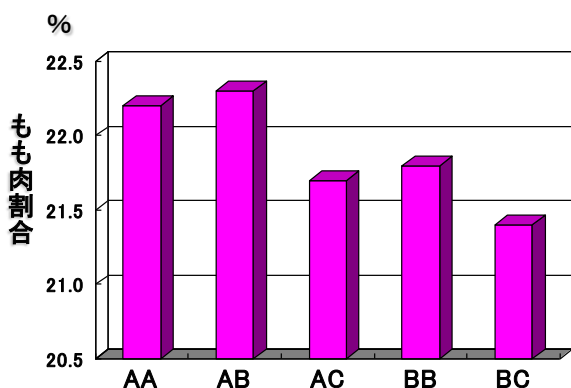
もも肉の需要はむね肉に対して圧倒的に多く、むね肉の2倍以上の価格で取引されています。農家にとってもも肉割合の多い鶏を生産することは、収入の増大につながります。

【目的】

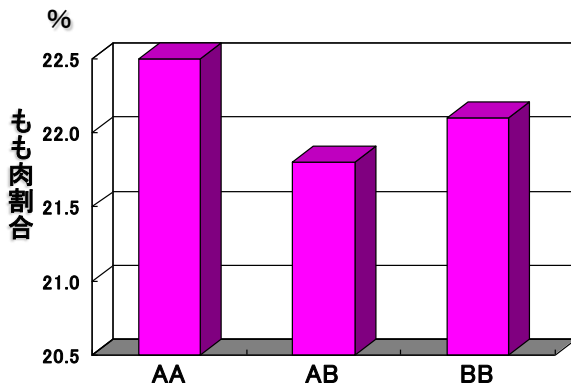
「ひょうご味どり」の改良をさらに進めるため、薩摩鶏と名古屋種を交配して生まれた雑種鶏(実験家系)を用いたゲノム解析により、もも肉割合の増加を図りました。

【成果】

- ・1番染色体の2個のDNAマーカー(ADL0019及びLEI0068)はもも肉割合の選抜に有用であり、いずれもA型が高いもも肉割合と相関がありました。
- ・2つのDNAマーカーのDNA型で選抜した種鶏を用いた「ひょうご味どり」による交配実証試験の結果、もも肉割合の平均値は24.6%となり、従来のもも肉割合(20%)よりも4.6%増加しました。

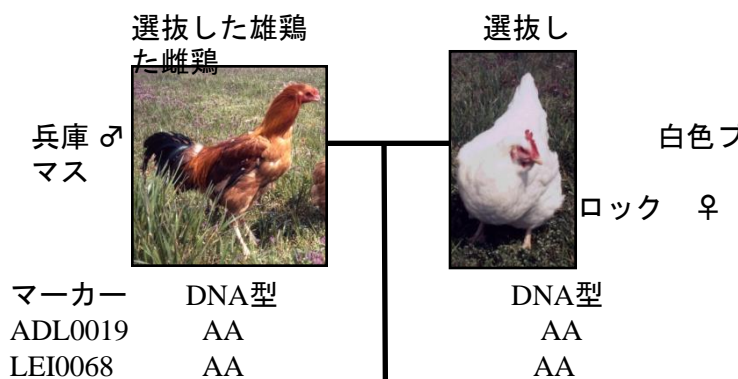


実験家系におけるADL0019のDNA型ともも肉割合との関係



実験家系におけるLEI0068のDNA型ともも肉割合との関係

交配実証試験



「ひょうご味どり」のもも肉割合が増加



↑ 4.6%増加



【技術の活用】

- ・平成24年度より、もも肉割合の高い「ひょうご味どり」の生産が可能となりました。
- ・「兵庫」の品種固定化と合わせ、形質にばらつきの少ない「ひょうご味どり」を生産します。